

手放さなければ得られないもの

ルカによる福音書 20 : 41 - 44

20:41 イエスは彼らに言われた。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。 20:42 ダビデ自身が詩編の中で言っている。

『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。 20:43 わたしがあなたの敵をあなたの足台とするときまで」と。』

20:44 このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

イエス様はエルサレムに入られたとき、群衆の歓呼の声を持って大歓迎を受けました。それは盛大な歓迎で、その様子をヨハネによる福音書では、「何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったのではないか。」(ヨハネ 12 : 19) とファリサイ派が嘆いたと語られています。大勝利ですね。しかもそれに難癖をつけた祭司長、律法学者、長老たちも、イエスとの論争に負けてしまい、しかも、ただ負けただけではなく、「先生立派なお答えです。」と感心する始末でした。けれどもどうして、このイエス様は十字架に磔にされ殺されるようなことになったのでしょうか。

もちろん支配者は何とかイエスを殺そうと謀っていたということがあります。また、弟子の裏切りもありました。けれども本当に驚きなのは、あの群衆が、何日もたたないのに「十字架につけよ、十字架につけよ」と叫ぶように豹変してしまったということです。

それは人々にとって、あまりにも期待はずれだったからでしょう。「なあんだ」とがっかりする程度ならば、そのようなことにはならなかったでしょうから、おそらくその失望は腹立たしいほどのものだったに違いありません。人々は、救い主の到来を待ち望んでいたはずです。そのために、まじめに働き、日々祈り、精進してきたはずです。救い主が来たなら、一緒に神の国のために働くのだ。そのつもりで生きてきたのです。こうした人々の期待を裏切ったばかりか、人々の日々の努力を踏みにじるほどのものを感じられたのです。

イエスはあっけなく逮捕され、裁判にかけられ、拷問を受け、侮辱され、なんら力強いものはありませんでした。ダビデの子は、宗教的・政治的・軍事的指導者であり、経済的な安定と繁栄をもたらしてくれるはずの人でした。それなのにイエスは全く無抵抗で弁明すらしなかったのです。

もちろんイエス様はその活動の初めから、力をふるう指導者ではないことを示され続けました。活動を始める前に受けられた荒野での断食修行では、パンをもたらす力、「一切の権力と繁栄」、神殿から飛び降りる超能力を、「いらない！」と拒否されました(ルカ 4:1-13)。一貫して、弱く無力な人々の側に立ち、ご自分も弱く無力であることを通して、神

様のみ力を示されました。けれども群衆は勝手にイエス様に力ある権力者像を投影した。無力なメシアという思想は到底受け入れられなかったのです。

ここには、恐らく当時のユダヤ教が、そして現代の私たちも陥っている大きな思い違いがあるのです。それは因果律というものの考え方です。原因があって結果があるという考え方です。現代で、この考え方を否定する人は、恐らくほとんどいないでしょう。努力すれば、それなりの結果がついてくるはずだ。怠けていれば、禍にあっても自業自得だという考えです。因果律は力を手にすることができるという考えをもたらします。

けれども旧約聖書は、そして新約聖書も、その信仰が伝えようとしていることは、あらゆる良いものは神から来るという考えです。新旧約聖書のどこをとっても、人間の努力とか協力が、場所を占めているところはありません。人間がなしうることは、皆無です。人間は何ら良いものを自分でもたらすことはできません。詩編の 16 にはこういう一節があります。「あなたはわたしの主。あなたのほかに私の幸はありません。」詩編の精神は、人間がなしうることは、ひたすら神から慈しみを受け、それによって神を賛美するだけだというものです。「主はわたしのために、すべてを成し遂げてくださいます。」(詩 138 : 8)「主を賛美するために民は創造された。」(詩 102 : 19)

因果律でものを考える考え方と、すべてを神様の御業に帰する考え方。この二つが激しくぶつかり合っています。人々は、期待通りの人生、期待通りの世の中になるためには、そのための原因が必要だと考えました。その原因は、ダビデの子にふさわしい王権です。政治的・経済的・軍事的・そして自然界にも影響を与えることのできる宗教的威力です。人々は、微力ながらそうした力の一翼を担おうと考えていました。

けれどもイエスは因果律ではものごとを考えませんでした。イエス自身は世直しのためには何をするつもりもなかったのです。ただ無力に殺されていく。その道を選びました。その姿勢は、今日の聖書の箇所 42-43 節からもわかります。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を、あなたの足台とする時まで」と。』ここで働かれるのは神です。神がメシアに告げた。あなたはここに座っていなさい。わたしが戦うから。人々が期待するのは「ダビデの子」、つまり行動力のある、結果を出すことのできる権力です。けれどもイエスが引用した詩編 110 の一節は、ダビデの上に立つ主でありながら、無力なのです。

イエスは、何もなさらなかった。復活ですら、自ら復活されたのではなく、復活させられた。つまり神の業です。ちなみに復活するというギリシャ語はアニステミで、常に受動態です。最後まで神の業です。最後まで神にゆだねることの勝利です。

ここには私たちが自分の為す業というものをどのように考えるべきかという大切な教えが示されています。結果は神が与えてくださる。わたしたちの業と、その結果との間には、直接の関係はない。この因果関係を否定するというのは、日常の体験からすればとてもク

レージーな考えです。けれど本当にクレージーでしょうか。因果律を手にした人間は、何でもできる、何をやっても良い、という禁断の木の実を食べることにならないでしょうか。因果律で支配する人間の知恵は、物心両面にわたって様々の問題を生み出してこなかったでしょうか。

では私たちの為す業が結果とは何の関係もないという考えを採用した場合、日々の私たちの業の意味は何でしょうか。それは祈りです。こうあってほしいという祈りを行動で示したものにすぎません。行動としての祈りです。もしうまくいったのなら感謝と賛美が出てきます。うまくいかなくても私たちの努力不足のせいではありません。それは祈りなのです。私たちの人生のすべてが祈りであり讃美なのです。現実には神の言葉が作り出しています。容積1.5リットルにも満たない私たちの脳で考える因果律ではない。私たちの脳には収まり切れない神様の現実の中で私たちは生かされているのです。これが神と共に歩むということです。何であれ、神様から良いものをいただきたいと思うのであれば、自ら作り出すことができるという考えを手放さなければなりません。あなたはここに座っていなさい。私が戦う。主が我が主に語られた言葉です。そして私たちにも語られています。この週も主の業を見ようではありませんか。